

Title	伝統芸能組織のマネジメント研究への活動理論アプローチ：人形浄瑠璃における後継者育成と鑑賞者開発の事例から
Author	高島, 知佐子 / 川村, 尚也
Citation	経営研究. 58(2); 81-104
Issue Date	2007-07
ISSN	0451-5986
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学経営学会
Description	

Osaka City University

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

伝統芸能組織のマネジメント研究への 活動理論アプローチ

— 人形浄瑠璃における後継者育成と鑑賞者開発の事例から —

高 島 知 佐 子 ・ 川 村 尚 也

- 1 研究目的と本稿の位置づけ
- 2 分析枠組みと研究方法
 - 2.1 伝統芸能の保存・継承に関する先行研究
 - 2.2 分析枠組みと研究方法
- 3 人形浄瑠璃文楽の事例分析
 - 3.1 人形浄瑠璃文楽の概要
 - 3.2 人形浄瑠璃文楽の活動システム
 - 3.3 人形浄瑠璃文楽の活動システムの変容
- 4 結論とインプリケーション

1 研究目的と本稿の位置づけ

近年、ユネスコの活動等¹⁾に見られるように、伝統的または古典的な芸術・芸能の保存・継承への関心が、世界的に高まりつつある。日本では、1950年の文化財保護法の施行以降、重要無形文化財や無形民俗文化財等の「伝統芸能」²⁾の保存・継承への取り組みが進められてきた³⁾。しかし、映画やテレビ、インターネットなどのマス・メディアによって提供されるさまざまな現代娯楽・芸能との競争の中で、それを鑑賞または演じるために特別な知識を必要とする伝統芸能は、鑑賞者と後継者の獲得において不利な状況にあるといわれている。とりわけ、鑑賞者の減少は、伝統芸能で生計をたてるのが困難になるという意味で、後継者の減少に拍車をかける。このため、近年の保存・継承への取り組みにおいては、鑑賞者開発が重要な課題であると認識されている。

さらに、制度論的に考えれば、こうした状況にある伝統芸能が、生き残るために選択してきた戦略が、鑑賞者と後継者の獲得をさらに困難にしている可能性も指摘できる。現代における伝統芸能の保存・継承への多くの取り組みは、伝統文化とは不変のものであり、したがって今後も今までと変わらない状態で保存・継承されるべきであるという、文化の本質主義的認識⁴⁾に立って自らを正当化している。しかし、アンダーソン（Anderson, 1991, 邦訳1997）やホブズボウムとレンジャー（Hobsbawm and Ranger, 1983, 邦訳1992）が指摘するように、

現代の多くの「伝統文化」は、近代化の過程で一旦は破棄され消滅した慣習等を、近代国民国家・国民文化の創出等の目的のもとに、「不変のもの」として意図的に再構築したものである。このような文化の構築主義的認識⁹⁾に立てば、現代の多くの伝統芸能は、実際には時代の変化に応じて、その実践を目立たぬように少しずつ変化させながら、一方で、日々新たに生み出される多くの現代娯楽・芸能との競争に生き残るために、「不変の伝統芸能」という「神話」(イメージ)を戦略的に構築し、国民文化の創出を企図する政府、あるいは民族的アイデンティティの具体的象徴をもとめる国民からの支援の獲得に成功してきたと捉えることもできる。

この視点に立てば、これらの伝統芸能は、現代娯楽・芸能との競争の中で鑑賞者を獲得していくために、こうしたイメージ戦略のいわば「代償」として、自らのあり方をダイナミックに変革していく可能性を、自ら封印せざるを得ない状況におかれているとも考えられる。また、日本の伝統芸能では、西欧の伝統芸能であるクラシック音楽やバレエなどと比べて、一般に「徒弟制」と呼ばれる前近代的な継承様式が広く用いられている。この継承様式は、芸の修得に長い時間がかかり、現代の若者にはなじみにくい指導法であるため、後継者の獲得と育成を困難にする一因となっているが、「不変の伝統芸能」というイメージを維持するために、やはり短期間に大きく変更しにくい状況にあるとも考えられる。

本研究の目的は、こうした複合的な要因によって、特段に重要かつ困難な課題となっていると考えられる、伝統芸能の後継者育成と鑑賞者開発を中心に、現代における伝統芸能組織のマネジメントのあり方について、新たな知見を得ることにある。本稿ではその基礎的作業として、現代の伝統芸能を、時代と共に常に変化しつつ、「不変のもの」として自らを構築し続けてきた活動として構築主義的に捉え、特にその後継者育成と鑑賞者開発の取り組みに焦点を当て、伝統芸能組織の活動の長期的変容を分析する。われわれが今日みる多くの伝統芸能組織は、その構成員の世代交代や様々な社会の変化にも影響を受けながら、技能や道具、上演スタイルなどを少しずつ変化させ、活動を続けてきたと考えられる。その具体的な事例として、日本の伝統芸能の1つである人形浄瑠璃を取り上げ、「浄瑠璃座」と呼ばれるその上演組織の活動が、近代化の過程でどのように変容してきたのかを明らかにしていく。

2 分析枠組みと研究方法

2.1 伝統芸能の保存・継承に関する先行研究

近年の日本における、伝統芸能の保存・継承に関する研究は、高度経済成長期以降の伝統芸能の衰退の原因として、その継承を担ってきた地域共同体の変容に着目している。これらの研究は、主に①伝統芸能の記録に関する研究、②伝統芸能の継承システムに関する研究、③伝統芸能の保護政策に関する研究の3つに大別できる。

伝統芸能の記録に関する研究は、北川・磯本(2001, 2002)に見られるように、伝統芸能のデジタルコンテンツ化による学習教材の開発、マルチメディアを駆使した伝統芸能の記録方法

の検討などに関するものである。その主要な関心は、後継者の高齢化や減少に対応するために、情報通信技術を活用して新たな学習方法を開発する、あるいは学校や公共施設等において伝承講座を設置するなどの形で、伝統芸能へのアクセシビリティを高めることにある。

伝統芸能の継承システムに関する研究は、降矢（1995）、渡邊（2002）、西郷（2002）、阿部（2005）などに見られるように、変容を続ける地域共同体による継承システムを補完するものとして、学校教育を用いた新たな継承システムを創出する可能性を検討している。近年多くの地域で、伝統芸能の後継者育成が、学校教育に取り入れられつつある⁶⁾。そこでは、成人向けの芸能に子供が興味を持つように、体験学習的な指導方法を採用したり、テキスト化をおこなうなど、新しい学習方法の模索が行われている⁷⁾。また、学校と地域住民との交流を通じた、地域共同体の再構築の可能性も検討されている⁸⁾。西郷（2002）によると、学校教育での後継者育成は、授業等で一度に多数の学習者を指導する必要性、あるいは文化的背景を異にする人々に平等に情報を提供する必要性などから、システムティックな指導法を生み出す可能性がある。さらに、学習者と学習方法の多様化によって芸が変化してしまう、あるいは、学校教育の対象となる芸能と対象とならない芸能の間に差別化が生じてしまうなどの危険性も指摘されている⁹⁾。

日本の伝統芸能保護政策に関して、保護の対象となる伝統芸能の実態調査を踏まえた希少な研究の1つである福田（2004）は、国の重要無形民俗文化財に指定された伝統芸能の間に、継承実態の格差が生じている事を指摘している。福田はその原因として、1) 国の文化財指定が、芸能の価値に偏重して行われており、地域共同体を含む、個別の継承状況を考慮していないこと、2) 指定後の運用が、地域共同体などの継承者と地方自治体に委ねられているため、自治体による支援に格差が生じていること、の2点を挙げている。また、文化財保護政策の構造上の問題点として、継承のために文化財を活用しようとする、それを変化させざるをえないため、保存という目標との間に矛盾が生じてしまうことを指摘している¹⁰⁾。

このように、近年の日本における伝統芸能の保存・継承に関する研究は、伝統芸能を地域共同体に埋め込まれた活動として捉え、変容する地域共同体の中でそれを保存・継承していくための新たな記録・学習ツールや継承システム、保護政策のあり方を検討している。その妥当性と実践的・政策的含意の有効性を検証するためには、前近代から現代にかけて、伝統芸能がどのように変化してきたかを、詳細に検討する必要がある。また伝統芸能とは、衣装¹¹⁾や楽器、舞台装置など固有の道具類を用いて、複数の演じ手と鑑賞者が協働でおこなう活動と捉えることができる。しかしながらこれらの研究では、こうした活動において道具類と鑑賞者が果たす役割については、十分な分析が行われていない。

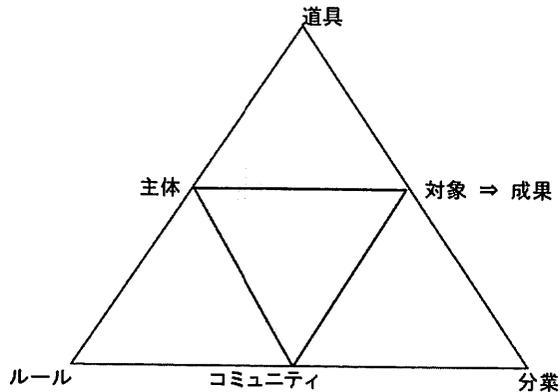
2.2 分析枠組みと研究方法

本稿では、先行研究ではあまり注目されていない、道具類と鑑賞者の役割に着目しながら、

近代化の過程における浄瑠璃座の活動の長期的変容を、とりわけその後継者育成と鑑賞者開発の取り組みに焦点を当てて分析する。そのための分析視点として、フィンランドの発達心理学者エンゲストローム (Y. Engeström) が提唱する「活動システム」(Activity System: Engeström, 1987, 邦訳 1999; Engeström, 1991; Cole and Engeström, 1993; Engeström, 1993; Engeström, 1998; Engeström, 1999a; Engeström, 1999b; Engeström, Engeström and Vähäaho, 1999; Tuomi-Gröhn, 2003; Tuomi-Gröhn and Engeström, 2003) のモデルを用いる¹²⁾。

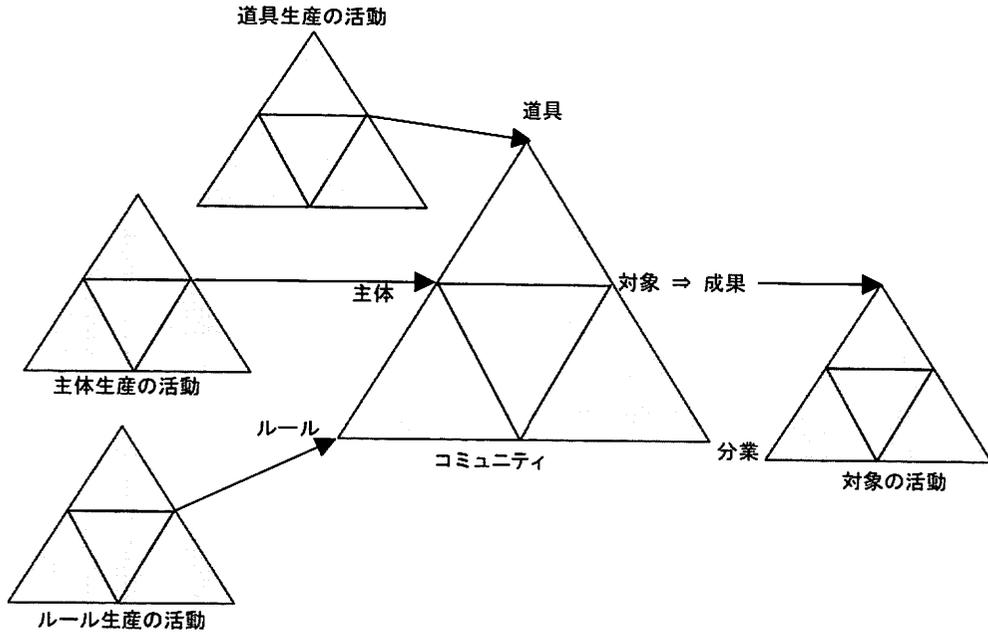
エンゲストロームは、人間活動の歴史的変容としての学習・発達を、① 個人やグループなど、活動の「主体」(subject)、② 主体がコミュニティの他のメンバーとともに働きかける「対象」(object)、③ 主体がコミュニティの中で対象に働きかける際に用いる物理的道具や言語、概念、理論、シンボルなどの「道具」(instrument)¹³⁾、④ 主体が対象に働きかける際に用いるもう1つの「媒介」であり、そこに主体の活動が埋め込まれている「コミュニティ」(community)、⑤ コミュニティによる対象への働きかけを媒介する「分業」(division of labor)、⑥ コミュニティの規範や慣習など、主体とコミュニティの相互の働きかけを媒介する「ルール」(rules) という6つの構成要素に着目して捉えようとする。これは、ロシアの発達心理学者ヴィゴツキー (L.S. Vygotsky) の文化-歴史的活動理論 (cultural-historical activity theory) における、主体、対象、媒介する人工物 (mediating artifacts) からなる「媒介された行為 (mediated action)」の概念を核とする、個人レベルの学習・発達モデルを、レオンチェフ (A. N. Leont'ev)、ダビドフ (V. V. Davydov) らの研究を援用して、集団レベルの実践の歴史的発展を記述し理解するための、ダイナミックなモデルに拡張したものである (図1)。ある活動によって生産された「対象」は、別の活動の構成要素として投入される。主体、道

図1 活動 (Activity)



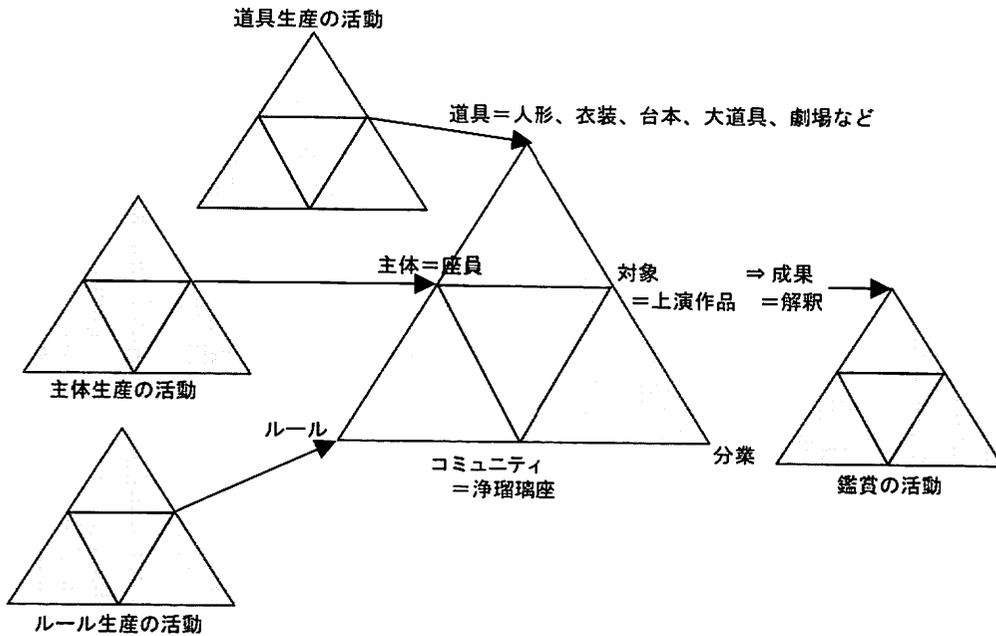
出所) Engeström, 1987, p. 76 Figure 2.6 をもとに筆者作成。

図2 活動システム (Activity System)



出所) Engeström, 1987, p. 87 Figure 2.7 をもとに筆者作成。

図3 人形浄瑠璃の活動システム



具、ルールは、それぞれ別の「主体生産の活動」（教育の活動など）、「道具生産の活動」（ものづくりや研究の活動など）、「ルール生産の活動」（立法や行政の活動など）の対象として生産されたものと捉えることができる¹⁴⁾（図2）。こうした構成要素の生産－投入関係を通じて、相互につながりあった活動の集合体は「活動システム」と呼ばれる。この活動システムは、その内部に多くの「矛盾」¹⁵⁾ (contradiction) を含んだ、極めて不安定なものである。エンゲストロームは、主体がこうしたさまざまな矛盾に気付き、それを解消するために新たな構成要素や実践のあり方を創造することで、活動システムの実践が歴史的に変容していく過程を、「拡張的学習」（Expansive Learning あるいは「拡張による学習」 Learning by Expanding）と呼んでいる。こうした拡張的学習は、主体が異なる活動の境界を横断する、「越境」（boundary-crossing）の活動を通じて促進される¹⁶⁾。

本稿では、浄瑠璃座の上演活動において、個々の座員を「主体」、上演に用いられる人形、衣装、大道具、小道具、練習場、劇場などを「道具」、浄瑠璃座とその主要な関係者を「コミュニティ」と位置づける。また、山住（2004）によれば、エンゲストロームとカリネン（T. Kallinenn）は、1988年の論文で劇場の活動システムを分析し、その中で劇場の「対象」は「劇場の対象として構成される生活世界」、劇場の「成果」は「想像された世界の中で生まれる生活世界」であり、この成果が、鑑賞者の生活世界という活動に、「道具」として投入されると論じている¹⁷⁾。本稿ではこれに依拠して、浄瑠璃座の活動の「対象」を上演作品、「成果」を鑑賞者による上演作品の解釈として分析をすすめる（図3）。

次章の事例分析では、上演活動を中心とする浄瑠璃座の現時点の活動システムを記述・分析した上で、それぞれの活動システムの歴史的変容を記述し、そのプロセスが拡張的学習として説明できるかどうかを検証する。事例分析に使用する調査データは、浄瑠璃座における参与観察と座員・関係者へのインタビュー調査、資料・文献調査を通じて入手している¹⁸⁾。

3 人形浄瑠璃文楽の事例分析

現代の人形浄瑠璃は、「三味線」の演奏と共に「大夫」が物語を語り¹⁹⁾、それにあわせて「人形遣い」が人形を操る、3つの技芸・職業（「三業」と呼ばれる）による複合的な舞台芸術であり、その一つの起源を西宮戎社の傀儡子に持つともいわれる。これら三業による人形浄瑠璃は、1684年に大阪で創設された竹本座の大夫であった、竹本義太夫（1651～1714年）が創案したものとされる²⁰⁾。その後1734年には、竹本座で「三人遣い」²¹⁾（一つの人形を三人の人形遣いで操る）の線法が創始され、これが18世紀を通して淡路の人形遣いなどによって全国に広められ、各地に浄瑠璃座がうまれた²²⁾。これらの座の多くは、現在では非職業的な浄瑠璃座として継承されている²³⁾。1983年の調査では、三人遣いの浄瑠璃座は全国に141座あり、うち58座が実演をおこなっていた²⁴⁾。本章では、現在も活発に活動を続けている三人遣いの浄瑠璃座のうち、公的支援を受けて唯一の職業的な座²⁵⁾として継承されている「人形浄瑠璃

文案」(大阪府大阪市、以下、文案と表記する)の事例を分析する。

3.1 人形浄瑠璃文案の概要

人形浄瑠璃文案という名称は、1789～1801年(寛政年間)頃に大阪・高津橋南詰で人形浄瑠璃の座と劇場を設立した、淡路出身の初世植村文案軒(1737～1810年)に因むものであり、現在の文案の直接の起源は、この文案軒の浄瑠璃座とされている。明治に入って、大阪府が遊所の整理のため松島新地(現在の大阪市西区九条)を開設し、劇場を誘致した際に、当時の座主であった植村大助(三世植村文案軒; 1842～1890年)は、同地に地所を購入して劇場の建設を願い出、1872年に「官許人形浄瑠璃文案座」を設立した²⁶⁾。この文案座は1884年に大阪・淡路町5丁目の御霊社に移転し、同年9月に「御霊文案座」として開業した。

明治から大正にかけて、大阪では彦六座(のちに稲荷座と改称)、明楽座、堀江座、近松座など多くの浄瑠璃座が誕生したが、いずれも大正期にかけて衰退した。御霊文案座の開業と同じ1884年には、大阪・稲荷神社境内に「彦六座」²⁷⁾が設立され、文案座と人気を二分する盛況を呈したが²⁸⁾、経営は安定せず²⁹⁾、1898年には付属品と共に、文案座に買収された³⁰⁾。1911年には、近松座株式会社を経営主体とする近松座が設立され、翌年には専用の新劇場を建設したが集客に失敗し1924年には興行を打ち切っている。

文案座も1902年以降は衰退し、座主の植村家は1909年に、「文案」の興行権と御霊文案座の建物、人形、衣装、絵看板、台本その他全てを、松竹合名会社(現在の松竹株式会社、以下、松竹と表記する)に売却した³¹⁾。以降、文案座は松竹の一事業として近代的経営方針のもとに興行が行われ³²⁾、後に大阪における人形浄瑠璃を独占した³³⁾。1926年に火災で御霊文案座の建物が焼失したため、松竹は1929年12月に旧近松座の劇場を買収し、「四ッ橋文案座」を開業した³⁴⁾。

1945年には戦災で四ッ橋文案座の建物が焼失したが、翌年には復興された。戦後は一部の大夫・三味線・人形遣いにより、その待遇改善を目的とした労働組合が結成され、1948年には三業従事者が、組合派の「三和会」と会社・非組合派の「因会」に分裂し、興行活動は停滞した³⁵⁾。その後、文案は1955年に国の重要無形文化財に指定され、1956年には道頓堀弁天座跡に劇場を新築・移転したが興行成績は振るわず、松竹は1963年に文案事業から撤退した。これをきっかけに三和会と因会は合併し、同年に政府、大阪府、大阪市、NHKの共同出資によって、財団法人文案協会(以下、文案協会と表記する)が設立された³⁶⁾。1984年には、大阪に国立文案劇場が建設され、独立行政法人日本芸術文化振興会(旧・特殊法人日本芸術文化振興会)の一事業として文案の公演が行われる、現在の体制が確立された³⁷⁾。

現在の文案は、国立文案劇場、文案協会、NPO法人人形浄瑠璃文案座の3つの公式組織によって運営されている。国立文案劇場は、大阪と東京の国立劇場における公演、伝統芸能伝承者の養成、伝統芸能調査研究・資料収集・活用などの事業を行っている。文案協会は、地方公

演など国立劇場以外での公演、文楽の資料収集と伝承、文楽基金の運営などの事業を行っている³⁸⁾。NPO 法人人形浄瑠璃文楽座は、三業従事者の団体であり、その前身は、人形浄瑠璃文楽の興隆発展と正しい継承、三業従事者の福利厚生と生活の安定向上等を目的に1965年に設立された人形浄瑠璃文楽座である。2002年にはNPO法人格を取得し、人形浄瑠璃研究会の開催、地方の浄瑠璃座、女流義太夫、歌舞伎等、他ジャンルの芸能人への指導等の活動もおこなっている。

3.2 人形浄瑠璃文楽の活動システム

本節では、現在の文楽の活動システムを、その構成要素ごとに記述し分析する。

[主体と主体生産の活動]

文楽の上演活動の「主体」は、芸芸員³⁹⁾と呼ばれる大夫・三味線・人形遣いである。芸芸員は、文楽協会を通して独立行政法人日本芸術文化振興会と契約し、国立文楽劇場と国立劇場の文楽公演に出演する⁴⁰⁾。この契約には、一ヶ月の報酬額⁴¹⁾、および、病気等やむを得ない理由で出演できなかった公演については、その報酬の8割が保証されることが明記されているが、それ以外の福利厚生についての条項はない⁴²⁾。ほかに地方公演や海外公演については、文楽協会と別途契約をして出演する。芸芸員は、こうした公演活動のほかに、NPO 法人人形浄瑠璃文楽座の活動として、義太夫節の振興や後継者の育成、地方人形浄瑠璃の指導等にも携わっている。

「主体生産の活動」である後継者育成の仕組みを見ると、近年の芸芸員の多くは、国立文楽劇場の「研修生制度」⁴³⁾、および文楽協会の「研究生制度」によって育成されている。このうち「研修生制度」とは、国立文楽劇場の事業として実施されている2年間の「養成所」制度であり、芸芸員希望者が、大夫・三味線・人形遣いに分かれて基礎的な技能を習得する。修了後は文楽協会と契約して芸芸員となる場合が多く、以後は特定の熟練芸芸員を「師匠」として、より高度な技能を習得していく。一方、「研究生制度」とは、文楽協会が仲介者となって、芸芸員希望者に「師匠」となる熟練芸芸員を紹介する制度である。研究生は、「師匠」の推薦を受けて文楽協会と契約を結ぶ場合が多く、「弟子入り」してから芸芸員になるまでの期間には個人差がある。研究生は芸芸員となった後も、同じ「師匠」の下で、より高度な技能を習得していく。

2006年時点で、研修生は21期を迎え、過去60名の修了者のうち42名が芸芸員として就業しており、現在の芸芸員総数のうち、研修生出身者は48%を占めている⁴⁴⁾。研修生は、1年目の4月から11月の適性審査までは、三業全ての実習と座学に取り組む。実習ではテキストは使用しない。座学には、作品・演目の内容、大阪の歴史と文化、日本舞踊等の古典芸能、茶道などが含まれる。適性審査によって三業のいずれかに専門が決定した後は、専門の実習に取り組む。2年目に実技の基礎が固まると、舞台実習を主に行い、2年目の1月には研修修了発表

会が開かれる。

「養成所」を修了した後は、その専門によって、舞台への初出演の時期が異なる。大夫・三味線は、修了した年の夏の公演頃から「ツレ」⁴⁵⁾として出演するが、人形遣いはしばらくの間は「介錯」⁴⁶⁾として舞台を手伝い、人形を遣う役にはつかない⁴⁷⁾。人形遣いは介錯から足遣い、左遣い、主遣いという順で技能を身につけ、一般的に足遣い10年、左遣い10年の修行が必要といわれている。大夫・三味線奏者は日ごろから各自または共に稽古を行うが、高価な人形を自費で購入できない若手の人形遣いは、主に本番を通して技能を習得していく。これは、人形の多くが劇場の所有となっているためである。三業が揃っておこなう稽古は、公演の前日の「通し稽古」のみである。

〔道具と道具生産の活動〕

上演活動で用いられる「道具」は、人形のカシラ⁴⁸⁾、カツラ⁴⁹⁾、衣装、小道具、大道具、芸員の衣装、大夫が使う床本⁵⁰⁾とそれを載せる見台、三味線のほかに、上演と稽古の場所としての劇場が含まれる。国立文楽劇場は、人形・小道具・衣装の保管・修繕・新調を行う、「道具生産の活動」のための組織でもある。人形は床山と呼ばれるカツラ担当者とカシラを専門とする人形細工人、衣装は縫製担当者と管理担当者（演目・役と衣装の組み合わせなどを記録管理する）、小道具は専門担当者によって、それぞれ製作・管理されている。文楽で使用されるカシラは約40種、300点あまりといわれている⁵¹⁾。

道具生産に携わる国立文楽劇場の専門職員は、カシラ、カツラ、衣装、舞台関係などの職種毎に、それぞれの熟練専門職員に「弟子入り」するような形でアルバイトで雇用され、後に職員として採用されるケースや、他団体での類似職種の経験者が中途採用で入職するケースなど、様々である⁵²⁾。

現在のカシラは、文楽座の座付き人形師であった大江巳之助によって製作されたものが多く、専門職員は主にこれらの修繕を行っている。公演毎に役柄に合わせて、胡粉と呼ばれる顔料でカシラの顔色や人形の手足を塗り替え、細工のメンテナンスを行う。カツラも、公演毎に役柄に合わせて毎回結いなおされる⁵³⁾。衣装は、公演毎に役柄に必要な衣装（帯、襟など）をそろえ、アイロンをかけて人形遣いの楽屋まで届けられる。人形に衣装を着付ける「人形拵え」は、人形遣いが行う。人形の衣装は、背中に穴が開いている点、胴体を肉付き良く見せるため綿が入っている点、襟に「棒襟」と呼ばれる綿が入ったものを使用する点に特徴があり、これらは衣装担当者によって縫製が行われる⁵⁴⁾。

小道具は、人形にあわせて大きさを計算して作られる。小道具の製作は、必要に応じて外部の業者に依頼する事もあるが、近年では小道具製作会社が減少しているため、小道具担当者が新調する事が多い⁵⁵⁾。大道具は、劇場付きの大道具会社が製作・管理しており、国立劇場の美術担当者⁵⁶⁾が描く道具帳をもとに製作する。芸員の衣装、大夫の見台、三味線は、芸員が自費で購入して使用する。

〔対象、成果、鑑賞の活動〕

「対象」である文楽の上演作品は、前近代から戦前までに創作された、一般に「古典」といわれる定番の演目のほかに、戦後に創作され評判が良かった「新作」など多岐にわたっている。国立文楽劇場での公演は、午前11時開演の第一部の場合は4時間ほどのプログラムであり、江戸時代より古い時代の貴族や武士の事件を扱った作品の総称である「時代物」、江戸時代の町人の生活等を背景にした事件、恋物語等の作品の総称である「世話物」、流麗で叙情的な文章を曲折豊かに演奏する音楽的小品の総称である「景事」等を、季節感や趣向などを考慮した組み合わせにより上演する事が多い⁵⁷⁾。

文楽では、鑑賞者開発の取り組みとして、レパトリーの充実のほかに、三業による解説がついた鑑賞者教室、夏休みの子供向け公演、国立文楽劇場内での道具の展示とボランティアによる解説、JR大阪駅構内での上演など近隣施設とのコラボレーションなどを行っている。

〔コミュニティ、分業、ルール〕

上演活動を支える「コミュニティ」は、国立文楽劇場、文楽協会、NPO 法人人形浄瑠璃文楽座という3つの公式組織の構成員であり、技芸員のほかに、国立文楽劇場で「道具」を管理する22名の専門職員と、東京・大阪公演の制作・運営等を行う38名（理事除く）の一般職員、文楽協会に所属する「床世話」⁵⁸⁾という4名（囃託2名を含む）の専門職員と、地方公演の制作・運営等⁵⁹⁾を行う10名の一般職員が含まれる⁶⁰⁾。

こうした文楽のコミュニティにおける「分業」のスタイルは、階層的で固定された分業と表現することができる。大夫、三味線、人形遣い、様々な道具と床世話を担当する専門職員、一般職員は、それぞれの職種毎に職務とキャリア・パスが明確に分離・固定されている。また、技芸員と一部の専門職員は師弟関係あるいは年功にもとづく階層関係、一般職員は公式組織による階層関係のもとで、それぞれの活動をおこなっており、職種間でも大夫を頂点とする階層関係がみられる。このような分業の背景には、座の活動を可能な限り従前通りに継続すること、および、各職種がその職務にできる限り専門化し、高度な技能の習得と発揮に専念すること、という「ルール」が存在していると考えられる。

3.3 人形浄瑠璃文楽の活動システムの変容

1909年に松竹へ譲渡された時点で、既に文楽座にとって、鑑賞者の獲得は大きな課題となっていた。活動システムにおける対象と鑑賞の活動との間に、矛盾が生じていたと考えられる。松竹の一事業となった文楽座は、この矛盾を解消するため、対象の変更を行った。1929年の四ッ橋文楽座の開場時には、鑑賞者の生活スタイルや嗜好（鑑賞の活動）の変化にあわせて、座席を座敷席から椅子席へ、上演形式を「建狂言」から「見取り狂言」へと変更し、開演時間を午後3時とした。さらにマチネーの設置、鑑賞者への床本の配布、人形との記念撮影等の新

しい試みもおこなった⁶¹⁾。これらは、近松座が行った改革をさらに進めたものであった。1920年代以降は、特定の三業従事者を重点的に宣伝し、重要な役を与え、人気に応じて処遇する「スター・システム」の導入も試みられた。1927年には、初代桐竹紋十郎の直門ではない吉田養助が二代目紋十郎を襲名し、襲名披露公演を行った。同年には、まだ若年の大夫に、その父の名声を引き継がせるために重要な役を与えたという記録も残っている⁶²⁾。1933年には、人気のある若手三業従事者による「リーグ式共演」と称した公演を行った。

松竹関係者が主導したと考えられる、これらの対象の変更の試みは、それまでの活動システムの他の構成要素との間に矛盾を生み出したが、この時期には、これらの構成要素の大きな変更はおこなわれず、矛盾の解消は進まなかったと考えられる。この時期には、スター・システムの成功に不可欠な、高い人気と技能を兼ね備えた若手を育成するために、芸術監督という役が新設され、三業から1人ずつ毎日交代で早朝から出勤して若手を指導する体制がつくられた⁶³⁾。しかし、この新たな主体生産の活動は長く続かず、以前のように三業のコミュニティにその活動が委ねられることになった⁶⁴⁾。蓄積された矛盾は、三業従事者の序列と処遇の固定化への若手の不満、すなわち若手三業従事者という主体と、活動システムの他の構成要素との間の矛盾として顕在化した。1936年には、一部の大夫と三味線奏者が四ツ橋文楽座を脱退して、「新義座」という新しい座を設立した。その原因として、上演形式が「見取り狂言」に変更されたため、大序（浄瑠璃の第一段の発端の小段）を担当する若手の大夫・三味線奏者の出演機会と収入が減少したことが指摘されている⁶⁵⁾。新義座は見取り狂言の素浄瑠璃を上演し、時には乙女文楽とも提携したが、1939年には解散した。

また、見せ場ばかりを集めた見取り狂言は、物語の内容や登場人物等がわからないままに上演が始まる。この上演形式がその後一般的になった事が、人形浄瑠璃を、従来よりも多くの予備知識を必要とする、潜在的な鑑賞者にとって難しいものに変えてしまったという指摘もある⁶⁶⁾。文楽についての知識を持つ一部の鑑賞者の活動の変化に合わせた対象の変更が、変更された対象と、その他の潜在的な鑑賞者の活動との間に矛盾をもたらし、その後の鑑賞者減少の一因になったとも考えられる。

その後文楽は、戦時中の空襲で多くの人形や衣装などを失い、終戦後は特殊な経済状況の下で、とりわけ若手の三業従事者の生活は困窮を極めた。当時の松竹と三業従事者との関係は、口頭による日雇い契約で、病気などで出演できなかった場合は無給という取り決めであった。このため1948年5月には、日本映画演劇労働組合大阪支部文楽座分会が設立され、当初は序列上位5名以外の全員が組合員となった。組合は「芸は生活手段でもあるという意識」⁶⁷⁾にもとづいて、松竹の社員と同じ身分を保証し、平均賃金を2400円から3700円へ引き上げ、さらに能率給を加算して固定給にするという、給与体系の変更と雇用契約制度の確立を要求した。同年10月には20名の三業従事者が組合を脱退し、組合員と非組合員はほぼ同数となった。以後、翌1949年6月から1963年の文楽協会設立まで、若手・中堅を中心とする組合派の三和会

と、序列上位者を中心とする非組合派の因会の2団体に分かれて活動が続いた。三和会は主に大阪・東京の三越劇場、因会は主に大阪の四ッ橋文楽座と東京の新橋演舞場で公演をおこなった。この三業従事者の分裂も、若手三業従事者という主体と、活動システムの他の構成要素との間の矛盾が顕在化したものとして捉えられる。

文楽はこうした分裂後も、対象と鑑賞の活動との間の矛盾を解消するために、新しい演目や演出の工夫、若年鑑賞者の獲得への取り組みなど、対象の変更に取り組んだ。三和会は、1955年に大阪の三越劇場で、民話に題をとった新作「瓜子姫とあまんじゃく」を上演した。口語体で分かりやすい「瓜子姫とあまんじゃく」は、現在でも上演されており、その成功は、その後の新作に「わかりやすさ」を求める端緒となった⁶⁹⁾。因会は、1953年と1956年に岡本綺堂の作品を浄瑠璃化し、1955年には「曾根崎心中」を野澤松之輔の脚本と作曲で復活させ、成功を収めた。1956年には、「お蝶夫人」「ハムレット」といった外国の演劇作品の浄瑠璃化を含め、多くの新作が制作された。現在でも上演されている「夫婦善哉」は、1956年に因会が制作した新作の一つである。

演出上の工夫として、人形遣いの出遣いが着用していた肩衣が、人形のカシラや衣装が引立たないほど派手になっていたため、因会では1952年に肩衣の着用を廃止し、袴も柄物から地味なものに変更した⁶⁹⁾。1956年に開場した道頓堀文楽座では、花道が常設された⁷⁰⁾。また、若年鑑賞者の獲得への取り組みとして、因会では1952年に学生文楽教室、三和会でも1953年に中高生のための文楽教室を開催した。因会は、道頓堀文楽座において学生向け一幕券を発行し、カシラや舞台写真などの展示も行ない、学生層の獲得に取り組んだ⁷¹⁾。

1956年の道頓堀文楽座の開場後は、道具と鑑賞の活動の間にも矛盾が生まれ、因会では道具の変更によってその解消を試みた。同年には、劇場の大きさに合わせて人形を試験的に大きくし、鑑賞者にその賛否を投票で尋ねている⁷²⁾。また、昭和30年代には外国人鑑賞者や海外公演が増加し、女形の人形の人気が高まった⁷³⁾。そこで、これにあわせて、女形の人形と衣装、カツラや花簪(かんざし)を大きくした⁷⁴⁾。一方で、劇場という道具の変更は、道具間の新たな矛盾も生み出した。道頓堀文楽座への移転によって、公演の度に、道具を松竹の倉庫から劇場へ運搬することになり、移動途中で人形等が損傷することがあった⁷⁵⁾。この道具間の矛盾は、1984年の国立文楽劇場の開場まで解消されなかった。

1963年に文楽協会が設立され、三和会と因会が合流した後は、現在に至る活動システムの変更がおこなわれた。慢性的な後継者不足の一因として、閉鎖的・固定的な師弟制度の問題が、幾度となく指摘されていた⁷⁶⁾。活動システムにおける主体生産の活動と、それ以外の構成要素との間に、矛盾が生じていたと考えることができる。この矛盾を解消するために、前述のように、1963年には研究生制度が設けられ、23歳以下の男子であれば、文楽協会から「師匠」の紹介を受けて「弟子入り」する事が出来るようになった。1973年には研修生制度が設けられ、中学校卒業以上の23歳以下の男子であれば、2年制の公式教育をうけて芸員になる道が開

かれた。

また、三業従事者の分裂を生み出した、若手技芸員という主体と、活動システムの他の構成要素との間の矛盾を解消するために、文楽協会の設立時には、現在の固定給による年間契約制が導入された。因会における1959年の「紋下（座の代表者）」⁷⁷⁾の役職の廃止に続いて、1963年には「人形頭取」⁷⁸⁾の役職も廃止された。道頓堀文楽座における道具相互の矛盾は、1984年の国立文楽劇場の開場後、全ての道具を劇場内に保管することによって解消された。

以上で概観してきたように、文楽はその歴史の中で、鑑賞者と後継者の減少という形で顕在化した活動システム内の矛盾を解消するために、対象、主体に関するルール、主体生産の活動、道具などの構成要素を徐々に変化させることで、後継者育成と鑑賞者開発に取り組んできた。現在の活動システムもさまざまな矛盾を内包しており、これらは次のような形で顕在化していると考えられる。

まず、文楽では近年、研修生・研究生の人数が減少しており⁷⁹⁾、技芸員数を増やすことが急務とされている⁸⁰⁾。その一因は、若手技芸員という主体と、活動システムの他の構成要素との間の矛盾が、十分に解消されていないことにあると考えられる。現在の活動システムにおいても、階層的な分業は変更されておらず、序列は現在の番付にも明確に記されている⁸¹⁾。松竹時代には、役の決定は、「奥役」と呼ばれる、芝居に精通し、演目・配役・給金などを取り仕切る、松竹の責任者が行っていた。奥役は常に三業従事者の技能レベルを判断し、時代物、世話物などと呼ばれる作品の特徴によって役を決めていた。この制度は文楽協会設立以降に廃止され、演目に関わらず序列のみで役を決定するようになった。しかし、技能の向上を客観的に判断するための明確な評価基準、および、それを序列と報酬に反映させるための評価制度が確立されていないため、若手技芸員のモチベーションの維持が難しくなっている⁸²⁾。

次に、道具と主体生産の活動、および道具と鑑賞の活動との間にも矛盾が指摘されている。人形など一部の高価で貴重な道具は、常に公演で使用され、その合間に国立文楽劇場でメンテナンスされている。そのため、若い技芸員が練習のために使用する機会、あるいは一般の鑑賞者が手にする機会はほとんどない⁸³⁾。

さらに、世界無形文化遺産への登録や襲名披露などによって、ここ数年、鑑賞者数は増加しているが、それが、対象と鑑賞の活動の間の矛盾の解消による、長期的な鑑賞者の増加に繋がっているという確証はない。現在も、見取り狂言での上演が続いているため、対象と鑑賞の活動の間の矛盾を解消するため、鑑賞者教室、床本に内容が記されたパンフレットの販売、イヤホンガイドを用いた解説などのサービスを提供している。しかし、これらの取り組みが、「文楽とは、予備知識を要する難しい芸能である」という鑑賞者の認識を払拭する事ほどの程度寄与しているか、また新たな鑑賞者の獲得をどの程度促しているかは、現在のところ明らかではない。

4 結論とインプリケーション

本稿では、活動システムを分析枠組みとして用いることで、先行研究ではあまり注目されていない、道具類と鑑賞者の役割に着目しながら、近代化の過程における浄瑠璃座の活動の長期的変容を、とりわけその後継者育成と鑑賞者開発の取り組みに焦点を当てて分析してきた。以上の分析から明らかのように、文楽は、その活動システム内のさまざまな矛盾を解消するために、活動システムを徐々に変化させてきた。本稿では、こうした活動システムの変容を生み出した、文楽の後継者育成と鑑賞者開発への取り組みは、固有の文化・社会・歴史的状況に埋め込まれた活動システムのユニークな変容過程、すなわち「拡張的学習」として捉えることができることを明らかにした。最後に今後の研究課題として、活動理論を用いた本稿の分析から得られた、伝統芸能組織のマネジメント研究へのインプリケーションについて簡単に言及しておきたい。

まず、本稿の分析から、伝統芸能組織の拡張的学習の過程においては、その中核となる活動システムを担うコミュニティを「開き」、当該活動システムと外部の活動システムとを結びつける「越境者 (boundary-crosser)」⁸⁴⁾を取り込んでいくことが、活動システムの変容のきっかけとなっていることが明らかになった。文楽では大正から昭和初期にかけて、松竹の関係者が、近代的な興行ビジネスの活動システムと、文楽の活動システムとを結ぶ越境者の役割を担い、活動システムの変更を試みてきたと考えられる。文楽協会の設立後には、学識経験者、支援企業やメディア等の関係者、大阪府・大阪市などの行政関係者などが、それぞれの活動システムと文楽の活動システムを結ぶ越境者の役割を担って、現在の活動システムが築かれてきたと考えられる。また、文楽の事例では、これらの越境者は、活動システム内の矛盾を明示化し、新たな活動モデルを構築し、コミュニティの支援を得て、活動システムを変更していくパワーをもっていた。今後の研究では、伝統芸能組織における拡張的学習の過程で、どのような越境者がどのような役割を果たしているのか、およびそうした越境者が必要なパワーを得られる、「コミュニティ・エンパワメント (community empowerment)」⁸⁵⁾の仕組みとはどのようなものなのかについて、より詳細に明らかにしていく必要がある。

次に、文楽の活動システムの変容過程において、主体だけではなく、劇場・人形・大道具といった道具が、コミュニティ、ルール、分業、主体生産の活動を規定している側面があることが明らかになった。これは、伝統芸能組織の分析において、「道具」に着目することの重要性を示唆する。その一つの展開の可能性として、本稿で用いた活動システムのような、ミクロレベルの分析に加えて、当該組織が埋め込まれている「組織フィールド (organizational field)」についてのマクロレベルの分析が、必要かつ有益であろうと考えられる。

組織フィールドとは、「制度的生活において特定の領域を構成していると認識される諸組織の集合」(DiMaggio and Powell, 1983)である⁸⁶⁾。現代の浄瑠璃座が埋め込まれている伝統

芸能の組織フィールドは、1) 他の浄瑠璃座、2) 能楽や歌舞伎など他の伝統芸能、3) 人形、衣装、小道具、大道具、脚本、稽古場、劇場などの「道具」を生産・供給する関連組織・産業、4) マス・メディア、5) 後援会等の支援組織、6) 伝統芸能組織あるいは活動の正統性を認める政府系組織あるいは専門家団体等によって構成されていると考えることができる。文楽は、3) 「道具」を生産・供給する関連組織・産業を媒介として、1) 他の浄瑠璃座および2) 能楽や歌舞伎など他の伝統芸能と結びついている。同時に文楽は、鑑賞者・後継者の獲得、および4) マス・メディア・5) 支援組織・6) 政府系組織・専門家団体の注目・支援・承認を巡って、これらの伝統芸能組織と競合関係にある。今後の研究では、こうした組織フィールドにおける伝統芸能組織の競争や協調などの組織間関係と、個別組織のミクローメゾレベルの活動の変化との間の相互作用について、より詳細に明らかにしていく必要があると考えられる。

注

- 1) ユネスコ（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization）では、主に世界無形文化遺産の認定制度を通して保存・継承に努めている。2003年10月ユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」において定められた無形文化遺産とは「慣習、描写、表現、知識及び技術並びにそれらに関連する器具、物品、加工品及び文化的空間であって、社会、集団及び場合によっては個人が自己の文化遺産の一部として認めるものをいう」と定義され、無形文化遺産が明示される特定分野の例として、1) 無形文化遺産の伝達手段としての言語を含む口承による伝統及び表現、2) 芸能、3) 社会的慣習、儀式及び祭礼行事、4) 自然及び万物に関する知識及び慣習、5) 伝統工芸技術を挙げている。日本では能楽、人形浄瑠璃文楽、歌舞伎が、世界無形文化遺産としてユネスコより宣言されている。
- 2) 伝統芸能という用語については様々な見解があり、伝統芸能と民俗芸能という呼び名の定義も曖昧である。本稿ではこれらを総称して伝統芸能と呼ぶ事とする。
- 3) 文化財保護法では、伝統芸能は無形文化財と民俗文化財と分類し、無形文化財とは「演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの」、民俗文化財とは「衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術及びこれらに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件で我が国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの」（文化財保護法、第一章総則第二条）と定義され、前者には能楽、人形浄瑠璃文楽、歌舞伎など、後者には各地の祭礼や能楽・舞台芸術等の風俗習慣および民俗芸能等が指定されている。
- 4) 人類学における文化本質主義、およびその批判としての構築主義については、中谷（2001）を参照。中谷によれば、文化本質主義とは「『文化』を特定の集団の成員によって過去から現在に綿々と受け継がれる習慣や価値体系の総体ととらえ、その非歴史性や固定性を強調」（114ページ。）する立場である。
- 5) 中谷（2001）によれば、人類学における構築主義とは、「文化や伝統、慣習がつねに取捨選択や駆け引きの対象となりながら、『現在（の固有の社会的・政治的コンテクスト）において構築されたもの』（114ページ。）とみなす立場である。
- 6) 渡邊裕美子、2002、49ページ；西郷由布子、2002、133ページ。
- 7) 阿部泰記、2005；降矢美禰子、1995；西郷由布子、2002
- 8) 渡邊裕美子、2002、51ページ；降矢美禰子、1995、118ページ。
- 9) 渡邊裕美子、2002、51ページ。

- 10) 福田裕美、2004、28 ページ。
- 11) 伝統芸能等の演劇においては「衣裳」と記される事が多いが、本稿では一般的に使用される「衣装」を用いる。
- 12) エンゲストロームの研究については、ほかに石黒、2004; 中原、2004; 山住、2004; 庄井、2005 を参照。代替・補完的な分析枠組みとして、「実践コミュニティ (Community of Practice)」(Lave and Wenger, 1991; Brown and Duguid, 1991; Wenger, 1998; Wenger, McDermott, and Snyder, 2002)、および、「アクター・ネットワーク理論 (Actor-Network Theory; 以下 ANT と表記する)」(Latour and Woolger, 1986; Latour, 1987; Callon, 1987; Latour, 1988; Law and Callon, 1992) が考えられる。実践コミュニティは、比較的安定した活動 (社会的実践) が、社会的相互作用を通じてどのように再生産されるかを明らかにするために開発されてきた概念枠組みであり (高木、1992; 1996)、本研究の目的である、実践の歴史の変容を捉える枠組みとしては、十分に展開されていない。ANT は、技術的イノベーションのプロセスを、それに関わる人間と人間以外のアクター (装置・設備や制度等の人工物、鉱物や微生物等の自然物質や人間以外の生物を含む) によって構成される、葛藤や対立を内包した不安定な「異質なネットワーク (heterogenous network)」の変化として捉え、そこで人間と人間以外のアクターが果たす役割を「対称 (symmetry)」的に記述しようとする。これまでの ANT 研究はこうした記述によって、主たるアクターが、「翻訳 (translation)」あるいは「変換 (transformation)」と呼ばれる政治的行為を通じて、人間と人間以外のアクターの新たな中核的ネットワークを構築していく過程を明らかにしてきた。Miettinen (1999) は、ANT を用いた実証分析において、アクターの定義が恣意的に行われる、研究者が注目する主たるアクター以外の、「声を持たない (silent)」アクターの役割が軽視される、人間が人間以外のアクターと同様に、意思・意図を持たず学習を行わない存在として扱われてしまう傾向があることを指摘し、ANT と活動理論の相互補完性について言及している。本研究の調査データを ANT を用いて解釈することで、活動システム内の矛盾とその解消過程の、より詳細な政治的分析が可能になると考えられるので、別稿で検討したい。ただし本研究では、複数の浄瑠璃座の比較分析の可能性を探るため、人形浄瑠璃文楽のほかに、非職業的な浄瑠璃座の一つである「相模人形芝居下中座」(神奈川県小田原市) の調査もおこなっている。同座の調査にあたっては、対象組織の実践のあり方を、その構成員と研究者が共同で研究する「発達のワーク研究」(Developmental Work Research: Engeström, 1987, 邦訳 1999) と呼ばれる研究手法を採用しているが、この手法における ANT の利用可能性については、十分な研究が行われていない。
- 13) 文献によっては mediating artifacts (媒介する人工物) あるいは tool と表記されることもある。
- 14) 山住勝広ほか、1999、92-93 ページ。
- 15) 山住勝広ほか、1999、91-95 ページ。エンゲストロームは4つのレベルの矛盾を識別している。第1レベルは、各構成要素そのものの交換価値と使用価値の間の矛盾、第2レベルは、各構成要素相互間の矛盾、第3レベルは、文化的により進んだ活動が生産した「対象 (あるいは目的)」を、別の活動の「対象 (あるいは目的)」として投入する際に現れる矛盾、第4レベルは、対象以外の各構成要素を生産する活動と、それが投入される別の活動との間の矛盾である。このうち本稿では、データ分析の最初の試みとして、比較的同意しやすい第2と第4レベルの矛盾に着目して分析を行う。
- 16) Tuomi-Gröhn and Engeström, 2003; Tuomi-Gröhn, 2003; Lambert, 2003 を参照。
- 17) 山住勝広、2004、327-328 ページ。
- 18) 人形浄瑠璃文楽については2003年から調査を行っている。
- 19) 「太夫」という文字が使用されていた時期もあったが、財団法人文楽協会により現在は「大夫」で統一されているため、本稿ではこれに従う。三味線の演奏と大夫の語りは「浄瑠璃」と呼ばれ、人形浄瑠

璃とは別の、単独の伝統芸能としても継承・上演されている。浄瑠璃には常磐津節、清元節、新内節などさまざまな流派がある。今日の人形浄瑠璃の浄瑠璃は「義太夫節」と呼ばれ、浄瑠璃の代表的流派となっている。

- 20) 廣瀬久也、2001、144 ページ；青木繁・林久美子、1999、103 ページ。
- 21) 高木浩志、1982、255 ページ。ほかに一人遣いと二人遣いの綴法もあるが、現存する浄瑠璃座では三人遣いを継承しているところが多い。
- 22) 1740 年ごろには関東地方へ伝わったとされる。
- 23) 現存する人形浄瑠璃の芸の形態や人形の大きさは地域や座によって多様である。また、座の形態も専属の大夫と三味線奏者をもたない、人形遣いだけで構成されているものもあり、人形芝居と称される事もある。
- 24) 人形のカシラのみを継承する座も含む。永田衡吉、1983、190-203 ページ。
- 25) 淡路人形座（兵庫県淡路島）も職業的浄瑠璃座であるが、同座は淡路島の吉田伝次郎座の道具を継承して、1964 年に創設された座である。1985 年の淡路人形浄瑠璃館の開設時に、拠点を福良から同館へ移している（創設時は三原が拠点であった）。
- 26) 人形浄瑠璃、座という呼び方は明治以降のものである。（倉田喜弘ほか、1997、5、17 ページ；安藤鶴雄、1980、36 ページ。）
- 27) 大阪府、1968、1033 ページ；倉田喜弘ほか、1997、34-35 ページ。当初は「彦六座」ではなく「彦六席」として興行を始めた。
- 28) 倉田喜弘ほか、1997、43-46 ページ。現在でも「文案系」に対して「彦六系」（あるいは非文案系）と称される芸の特色が残っている（倉田喜弘ほか、1997、46 ページ）。
- 29) 「彦六座」は 1893 年に解散し、翌年に花里藤兵衛がこれを買取り、「稲荷座」と改称したが、1898 年には、稲荷座を運営する大阪文芸株式会社の株主総会で、稲荷座の解散が決議された。
- 30) 大阪府、1968、1034 ページ；倉田喜弘ほか、1997、38-40 ページ。
- 31) 大阪府、1968、1035 ページ；坪内幸夫、1997、55 ページ。
- 32) 大阪府、1968、1190 ページ。
- 33) 大阪府、1968、1035、1190 ページ。
- 34) 高木浩志、1997、92 ページ。
- 35) 廣瀬久也、2001、222 ページ；高木浩志、1997、105、108、111、113 ページ。
- 36) 廣瀬久也、2001、225-226 ページ。
- 37) 廣瀬久也、2001、228 ページ。
- 38) 財団法人文案協会趣意書および日本文化芸術振興会平成 16 年度業務報告書。
- 39) 技芸員は公演によって収入を得ている。国立文案劇場の支出のうち技芸員への人件費が占める割合は、およそ 60% であり、年々増加傾向にある（国立文案劇場公演収支計算書より算出）。
- 40) 国立文案劇場では毎年約 5 回（各約 22 日）、国立劇場では約 4 回の公演が行われており、合計の公演日数は約 140 日である。
- 41) 技芸員ごとに異なる、出演一回あたりの報酬額に、全技芸員に保証されている、国立文案劇場および国立劇場における年間出演回数 136 回を掛けた金額を、12 で除したものを、公演回数は年により若干変動する。
- 42) 2007 年 1 月 19 日文案協会・塚本勝彦氏へのインタビューによる。
- 43) 国立文案劇場の募集により国立文案劇場の持つ養成所に入る。研修生の応募資格は、中学卒業以上 23 歳までの男子で、受講料は無料であり、「賞与」（奨励費）や奨学金制度もある。

- 44) 国立劇場・国立文楽劇場資料「伝統芸能伝承者養成事業一覧(二)」。
- 45) 補助的な役割を意味する。
- 46) 介錯とは、舞台上で使用する小道具を人形遣いに渡したり、それを下げたりする役割である。
- 47) 福岡市文化芸術振興財団、2005
- 48) 文楽では首(カシラ)と表記されるが、便宜上カシラとする。
- 49) 文楽では「かづら」と表記されるが、便宜上カツラとする。
- 50) 浄瑠璃の物語を冊子にしたもので、語る際の節回しが朱で書き入れられている。
- 51) 藤田洋、2003年、49ページ。
- 52) 日経ネット関西版、2006年11月14日付記事；読売新聞、2005年11月22日付記事。
- 53) 山田庄一ほか、2006年、96-101ページ。
- 54) 山田庄一ほか、2006年、106-107ページ。
- 55) 山田庄一ほか、2006年、133-134ページ。
- 56) 美術の専門職員は東京の国立劇場に在籍しており、文楽だけではなく歌舞伎や日本舞踊などの舞台美術も担当する。
- 57) 藤田洋、2003年、20-27ページ。
- 58) 公演中に大夫・三味線が交代する際に舞台を回す係。
- 59) 配役・日程・演目等を決定する。
- 60) 以下、各団体の職員数は、別記のない限り、2006年5月31日時点での職員数である。
- 61) 鎌倉恵子、2006、162ページ。
- 62) 高木浩志、1997、83、98-99ページ。
- 63) 木谷蓬吟、1943、289ページ。
- 64) 高木浩志、1997、99ページ。
- 65) 高木浩志、1997、101-102ページ。
- 66) 高木浩志、1997、93ページ。
- 67) 高木浩志、1997、114ページ。
- 68) 高木浩志、1997、121-123ページ。
- 69) 高木浩志、1997、124-125ページ。これに伴って、袴代として支給されていた手当が廃止され、現在も袴は人形遣いが自費で調達している。
- 70) 鎌倉恵子、2006、163ページ。
- 71) 園田学園大学近松研究所、1995、65ページ。
- 72) 園田学園大学近松研究所、1995、79-80ページ。
- 73) 園田学園大学近松研究所、1995、95ページ。
- 74) 鎌倉恵子、2006、174ページ。
- 75) 鎌倉恵子、2006、157ページ。
- 76) 倉田喜弘ほか、1997、43ページ。
- 77) 1959年に、当時紋下を務めていた大夫・豊竹山城少掾の引退をもって廃止された(鎌倉恵子、2006、158ページ。)
- 78) 人形遣いと人形に関する一切の責任を負っていた。1963年4月に若手の人形遣いが、舞台初日前夜に約30個のカシラを損壊する事件があった(日本経済新聞、1991年9月26日付、36ページ。)。この事件をうけて、人形遣い一同で協議して、人形頭取という役職を廃止した(鎌倉恵子、2006、158ページ。)
- 79) 2年に1度募集していた研修生制度だったが、2006年に続いて2007年も連続で募集をしている。

- 80) 権藤芳一、1997、152 ページ。
- 81) 頭に切と書かれた大夫、頭に三味線と記される三味線が最高位を指し、人形においては、左の筆下が座頭、次いで筆上で隙間がある別書出し、後は左から右の順に人形遣いの地位をあらわしている。（NPO 法人人形浄瑠璃文楽座、2005）
- 82) 竹澤團六・垣内幸夫、1997、206 ページ。
- 83) 近年になり、国立文楽劇場の展示室では、従来の展示だけではなく、人形に実際にふれ記念撮影が出来るなどのサービスが追加されている。
- 84) Tuomi-Gröhn and Engeström, 2003; Tuomi-Gröhn, 2003; Lambert, 2003 を参照。
- 85) コミュニティ・エンパワメントについては、Minkler and Wallerstein, 1997; Wallerstein, 1992; 川村, 2003 を参照。
- 86) 組織フィールドの概念については、ほかに Scott, Ruef, Mendel and Caronna, 2000; Scott, 2001 を参照。

参考文献

（本・論文）

- 青木繁・林久美子（1999）「人形浄瑠璃」『日本芸能史』昭和堂、95～143 ページ。
- 阿部泰記（2005）「東アジア伝統人形劇の継承と発展」『東アジア研究』、第4号、山口大学大学院東アジア研究科、1-9 ページ。
- 安藤鶴雄（1980）『文楽 芸と人』朝日新聞。
- 石黒広昭（編著）（2004）『社会文化的アプローチの実際－学習活動の理解と変革のエスノグラフィー』北大路書房。
- 上野千鶴子（編）（2001）『構築主義とは何か』勁草書房。
- 大阪府（1968）『大阪百年史』。
- 鎌倉恵子（2006）「〔聞き書き〕人形浄瑠璃文楽の昭和から平成へー吉田文雀師に聞くー」、『芸能の科学』、第33号、151-181 ページ。
- 川村尚也（2003）「健康教育のためのコミュニティ組織とコミュニティビルディングー多文化社会における知識創造のための多文化組織へのアプローチ2ー」『経営研究（大阪市立大学経営学会）』第53巻第4号、151-165 ページ。
- 北川博美・磯本征雄（2001）「伝統芸能の保存と継承のためのマルチメディア教材の作成」『教育システム情報学会研究報告』、2001（1）、教育システム情報学会、13-18 ページ。
- 北川博美・磯本征雄（2002）「伝統芸能の保存と継承のための動画像デジタル化とその活用技術」『電子情報通信学会技術研究報告』、102（139）号、電子情報通信学会、31-36 ページ。
- 木谷蓬吟（1943）『文楽史』全国書房。
- 倉田喜弘ほか（1997）『岩波講座歌舞伎・文楽第10巻 今日文楽』岩波書店。
- 権藤芳一（1997）「現代文楽」『岩波講座歌舞伎・文楽第10巻 今日文楽』岩波書店、149-162 ページ。
- 西郷由布子（2002）「芸の教え方・覚え方ー学校的社会と芸能ー」『演劇学論集』、通号40号、日本演劇学会、127-141 ページ。
- 坂口弘之（監）（1999）『日本芸能史』昭和堂。
- 庄井良信（2005）「コラボレーションの発達援助学」『フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書店、234-259 ページ。

- 白石さや・白石隆(訳)(1997)『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』NTT出版 (Anderson, Benedict (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised Edition, Verso)
- 園田学園大学近松研究所(編)(1995)『参考・吉永孝雄の私説 昭和の文楽』和泉書院。
- 高木光太郎(1992)「状況論的アプローチにおける学習概念の検討」『東京大学教育学部紀要』第32巻、265-273 ページ。
- 高木光太郎(1996)「第2章 実践の認知的所産」波多野誼余夫(編)『認知心理学 5 学習と発達』東京大学出版会、37-58 ページ。
- 高木浩志(1997)「激動の昭和文楽」『岩波講座歌舞伎・文楽第10巻 今日文楽』岩波書店、81-146 ページ。
- 高島知佐子・川村尚也(2006)「伝統芸能の継承と鑑賞者開発のマネジメント—人形浄瑠璃の事例から—」文化経済学会<日本>年次大会予稿集 2006、190-193 ページ。
- 竹澤園六・垣内幸夫(1997)「文楽の演出(二)—昭和の文楽三味線—」『岩波講座歌舞伎・文楽第10巻 今日文楽』岩波書店、197-215 ページ。
- 坪内幸夫(1997)「近代との摩擦—大正期の文楽—」『岩波講座歌舞伎・文楽第10巻 今日文楽』岩波書店、55-80 ページ。
- 中谷文美(2001)「第四章 <文化>? <女>?—民族誌をめぐる本質主義と構築主義」『構築主義とは何か』勁草書房、109-137 ページ。
- 中原淳(2004)「教師の学習共同体をつくりだす: コンピューターに媒介された協調学習のデザインと介入」『社会文化的アプローチの実際—学習活動の理解と変革のエスノグラフィー—』北大路書房、186-208 ページ。
- 永田衛吉(1983)『生きている人形芝居』錦正社。
- 野村恭彦(監)(2002)『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社。(Wenger, E., McDermott, R. and Snyder, W. (2002) *Cultivating Communities of Practice: A Guide to managing Knowledge*, Harvard University Press)
- 廣瀬久也(2001)『人形浄瑠璃の歴史』戎光祥。
- 福田裕美(2004)「文化財政策における民俗芸能の継承にかかわる課題についての研究—「大江の幸若舞」「水海の田楽能舞」「能郷の能・狂言」を事例として—」『文化経済学』、第4巻第1号(通号第16)、文化経済学会<日本>、19-30 ページ。
- 藤田洋(編)(2003)『文楽ハンドブック 改訂版』三省堂。
- 降矢美彌子(1995)「民俗芸能の伝統と継承—「じゃんがら念仏踊り」のフィールドワークから—」『宮城教育大学紀要 第一分冊人文科学・社会科学』、通号30号、宮城教育大学、97-120 ページ。
- 前川啓治・梶原景昭ほか(訳)(1992)『創られた伝統』紀伊國屋書店。(Hobsbawm, Eric. J and Ranger, Terence. O. eds. (1983) *The invention of tradition*, Cambridge University Press)
- 山住勝広ほか(訳)(1999)『拡張による学習 活動理論からのアプローチ』新曜社。(Engeström, Y. (1987) *Learning by Expanding: An activity-theoretical approach to developmental research*, Helsinki: Orienta-Konsultit)
- 山住勝広(2004)『活動理論と教育実践の創造—拡張的学習へ』関西大学出版部。
- 山田庄一ほか(監)『舞台裏おもて 歌舞伎・文楽・能・狂言』マール社。
- 渡邊裕美子(2002)「民俗芸能の保存と継承」『藝能』、vol. 8、藝能学会、42-54 ページ。

(雑誌・記事)

NPO 法人人形浄瑠璃文楽座 (2005) 『会報文楽通信』、第 4 号、2005 年 10 月 5 日。

福岡市文化芸術振興財団 (2005) 『福岡市文化芸術振興財団機関誌 Wa』、2005 年 4・5 月号 vol 25。

日経ネット関西版、2006 年 11 月 14 日付記事

読売新聞、2005 年 11 月 22 日付記事

「文楽人形遣い吉田玉男氏 (25) 事件 —— 折られた人形の胴串 (私の履歴書)」『日本経済新聞』1991 年 9 月 26 日付、36 ページ。

(インタビュー)

2007 年 1 月 19 日、財団法人文楽協会・塚本勝彦氏

(法令等)

“The UNESCO Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage” in October 2003 (日本語訳: 『ユネスコ無形文化財保存振興日本信託基金』2005 年 10 月、The Intangible Heritage Section, Division of Cultural Heritage, UNESCO Paris、8 ページ。参照)
文化財保護法、1950 年 5 月 30 日法律第 214 号施行、最終改正 2006 年 6 月 15 日法律第 73 号 (全文は <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S25/S25HO214.html> を参照、2007 年 5 月 5 日閲覧)

(英語文献)

- Anderson, Benedict (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (Revised Edition), Verso.
- Brown, J. S. and P. Duguid (1991) “Organizational Learning and Communities-of-Practice: Toward a Unified View of Working, Learning, and Innovation,” *Organization Science*, 2-1, pp. 40-57.
- Callon, M. (1987) “Society in the Making: The Study of Technology as a Tool for Sociological Analysis,” in W. E. Bijker, T. P. Hughes, and T. Pinch eds. *The Social Construction of Technological Systems: New Directions in the Sociology and History of Technology*, Cambridge, MA: The MIT Press, pp. 83-103.
- Cole, M and Engeström, Y. (1993) “A cultural -historical interpretation of distributed cognition,” in G. Salomon ed. *Distributed Cognition*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-46.
- DiMaggio, P. J. and W. W. Powell (1983) “The iron cage revisited: Institutional isomorphism and collective rationality in organizational field,” *American Sociological Review*, 48(2), pp. 147-160.
- Engeström, Y. (1987) *Learning by Expanding: An activity-theoretical approach to developmental research*, Helsinki: Orienta-Konsultit.
- Engeström, Y. (1991) “Developmental work research: Reconstructing expertise through expansive learning,” in M. I. Nurminen and G. R. S. Weir eds. *Human jobs and computer interfaces*, Amsterdam: Elsevier Science Publishers, pp. 276-290.
- Engeström, Y. (1993) “Developmental studies of work as a testbench of activity theory: The case of primary care medical practice,” in S. Chaiklin and J. Lave eds. *Understanding*

- practice: Perspectives on activity theory and context*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 64–103.
- Engeström, Y. (1998) "The Tensions of Judging: Handling Cases of Driving Under the Influence of Alcohol in Finland and California," in Y. Engeström and D. Middleton eds. *Cognition and Communication at Work*, Cambridge: Cambridge University Press, p. 199–232.
- Engeström, Y. (1999a) "Activity Theory and Individual and Social Transformation," in Engeström, Y., R. Miettinen, and R. Punamäki eds. *Perspectives on Activity Theory*, Cambridge University Press, pp. 19–38.
- Engeström, Y. (1999b) "Innovative learning in work teams: Analyzing cycles of knowledge creation in practice," in Engeström, Y., R. Miettinen, and R. Punamäki eds. *Perspectives on Activity Theory*, Cambridge University Press, pp. 377–404.
- Engeström, Y., Engeström, R. and Vähäaho, T. (1999) "When the Center Does not Hold: the Importance of Knotworking," in Chaiklin, S. Hedegaard, M. and Jensen, U.J. eds. *Activity Theory and Social Practice: Cultural-Historical Approaches*, Aarhus University Press, pp. 345–374.
- Hobsbawm, Eric. J and Ranger, Terence. O eds. (1983) *The Invention of Tradition*, Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Lambert, P. (2003) "Promoting Developmental Transfer in Vocational Teacher Education," in Tuomi-Gröhn, T. and Y. Engeström eds. *Between School and Work: New Perspectives on Transfer and Boundary-crossing*, Pergamon, pp. 233–254.
- Latour, B. (1987) *Science in Action: How to follow scientists and engineers through society*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Latour, B. (1988) *The Pasteurization of France*, (translated by A. Sheridan and J. Law), Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Latour, B. and S. Woolger (1986) *Laboratory Life: The Construction of Scientific Facts*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Lave, J. and E. Wenger (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Law, J. and M. Callon (1992) "The Life and Death of an Aircraft: A Network Analysis of Technical Change," in W. E. Bijker and J. Law eds. *Shaping Technology/Building Society: Studies in Sociotechnical Change*, Cambridge, MA: The MIT Press, pp. 21–52.
- Miettinen, R. (1999) "The Riddle of Things: Activity Theory and Actor-Network Theory as Approaches to Studying Innovations," *MIND, CULTURE, AND ACTIVITY*, 6(3), pp. 170–195.
- Minkler, M. and N. Wallerstein (1997) "Improving Health through Community Organization and Community Building: A Health Education Perspective," in M. Minkler ed. *Community Organizing and Community Building for Health*, (pp. 30–52) New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.
- Scott, W. R. (2001) *Institutions and Organizations* (2nd. Ed.), Sage Publications.
- Scott, W. R., M. Ruef, P. J. Mendel and C. A. Caronna (2000) *Institutional Change and Health-*

- care Organizations*, University of Chicago Press.
- Tuomi-Gröhn, T. (2003) "Developmental Transfer as a Goal of Internship in Practical Nursing," in Tuomi-Gröhn, T. and Y. Engeström eds. *Between School and Work: New Perspectives on Transfer and Boundary-crossing*, Pergamon, pp. 199-231.
- Tuomi-Gröhn, T. and Y. Engeström (2003) "Conceptualizing Transfer: From Standard Notions to Developmental Perspectives," in Tuomi-Gröhn, T. and Y. Engeström eds. *Between School and Work: New Perspectives on Transfer and Boundary-crossing*, Pergamon, pp. 19-38.
- Wallerstein, N. (1992) "Powerlessness, Empowerment, and Health: Implications for Health Promotion Programs," *American Journal of Health Promotion* 6(3), pp. 197-205.
- Wenger, E. (1998) *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*, Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Wenger, E., McDermott, R. and Snyder, W. M. (2002) *Cultivating Communities of Practice: A Guide to managing Knowledge*, Harvard Business School Press.
- Vygotsky, L. S. (1978) *Mind in Society: The development of higher psychological processes*, Harvard University Press.

An Activity-Theoretical Approach to the Management Study of Traditional Performing Arts Organizations

— A Case Study of Successor and Audience Development

of Ningyo Johruri Puppet Play —

Chisako Takashima, Takaya Kawamura

Summary

Abstract: Based on the constructionistic view of culture, this paper examines the long-term transformation of the activities of the Japanese traditional puppet play company “Ningyo Johruri Bunraku” in the period of modernization in order to obtain implications for the management study of traditional performing arts organizations. The research data is analyzed from the viewpoint of the “Activity System” proposed by Y. Engestrom. The analysis shows that the transformation of the activities of Bunraku as the result of successor and audience development is better understood as a process of “expansive learning,” i.e., the creation of new organizational activities to resolve the contradictions in an activity system embedded in its socio-cultural-historical contexts. The case analysis implies that traditional performing arts organizations can facilitate expansive learning by accepting and empowering divergent “boundary crossers” that link their activity systems with other external activity systems. The analysis also suggests that we need to pay due attention to the role of “instruments” and the “organizational field,” in which the organizations are embedded, in order to understand and manage such processes of expansive learning.

Key Words: Traditional Performing Arts Organizations, Performing Arts, Activity Theory, Expansive Learning, Boundary Crossing